

**[文献紹介] 鈴木祥蔵著「同和」保育と子どもの人権**

著者	田中 欣和
雑誌名	教育科学セミナー
巻	17
ページ	29-29
発行年	1985-12-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00019520">http://hdl.handle.net/10112/00019520</a>

鈴木祥蔵 著

## 「同和」保育と子どもの人権

明石書店 (1985. 7)

部落解放教育・「同和」保育運動に広く影響力をもつ著者が近年雑誌等において書かれたもののうち「同和」保育・幼児教育に関するものをあつめて編まれたのが本書。

本学教育学科・教育学会の代表的人物である著者の識見やお人柄は本学会会員には周知のことながら、そのしなやかな人間観、リベラルな思想と不退転の理想主義とが、もっともよく表現されているのが近年では「同和」保育運動にかかわってのおしごとである。

14編の文章が整理されて単行本になった訳だが、著者の近年の強調点をひとまず理解しようと思えば、序章の『「同和」保育の基本認識』と補遺の「感性の意味するもの」とから読むことも、すでに教育・教育問題にかかわって考えてこられた読者には許されよう。自然的・社会的存在としての人間のよき可能性をおしつぶす差別への怒りは、氏の場合すぐれて教育思想的である。そこから出発して「被形成者から主体的自己変革者へ」という基本テーゼを通して実践的提言に至る氏の思想の骨組はここで示されている。もう1つの強調点として「感性」を「理性」より低次のものとする毛沢東的認識段階論やそれを経験主義としてのみ批判する「科学主義」とはちがって、全人格的な理解における「感性」の意義をとらえ、感性の階級的被形成から目を離さないで、しかも感性や共通感情を育てるということを重大な課題としていく。その回路においてワロンの「融即」概念からうけた示唆は重要であったろう。

そのあたりを示すには著者のあげられる事例の一、二を見ればよい。たとえば保母さんが子どもを連れて散歩するとき、犬のふんがあるたびに「汚ない汚ない」といって避けて歩く。子どもたちもみんなその通りにまねをする。著者はその一面性を指摘して、バキューム・カーの運転手を父にもつ小学生の作文の話を保母さんにする。しばらくしてその保育所に行くとき大きなチューリップの花が咲いている。保母さんは子どもたちとの散歩のとき犬のふんをひろってきて苗床にいられたのだった。「今年は特別大きく咲きました」という。子どもたちも著者を追いかけて来て「先生、知ってるか、これな、犬のふんの肥料やで、大きく咲いたやろう」という。著者のいう「感性を開いていく保育」の一例である。

同じ観点をまとめて示しているのは「子どもの美意識とは何か」であり、「汚ない」と「きれい」、「きれい」と「美しい」といった観念をときほぐしながら、子どもの感性を「きれい」「かっこいい」ととどめて「美しい」ものから切り離すコマーシャルや政策への批判が述べられる。

著者は革新的な教育学者として知られているが、その革新性は限定された意味での政治的な次元においてよりも、美的・倫理的・教育的なものであることによって批判力・変革力を持っているのだと思う。

(田中欣和)